

Title	新しい寺
Author(s)	ムハンマド, イクバル; 松村, 耕光
Citation	印度民俗研究. 2021, 20, p. 35-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/86920">https://hdl.handle.net/11094/86920</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 新しい寺

ムハンマド・イクバル

松村 耕光 訳



新しい寺

## 新しい寺<sup>1</sup>

(雑誌『<sup>マガジン</sup>宝庫』1905年3月号より)

バラモンよ、気を悪くしないなら、率直に言おう

おまえの寺の神像はもはや時代遅れになっている

おまえは仲間に敵意を抱くことを神像から学び

神はイスラーム説教者に鬭争することを教えた

愛想が尽きて私は寺にもモスクにも行くのをやめた

イスラーム説教者の話もおまえの話も聞くのをやめた

開花を促すことを考えよ——おまえは庭師なのだから

有毒な空気が植物を枯らしてしまった

石の神像に神が宿るとおまえは信じるが

祖国の土一粒一粒が私にとっては神なのだ

さあ、よそよそしさの覆いを取り払い

離れた者たちを結びつけ、分裂の印を消し去ろう

心の街はずっと荒れ果てたままだ

さあ、この国に新しい寺を建立しよう

私たちの聖地は世界のどの聖地よりも高いところになければならぬ

さあ尖塔を天の裾に届かせよう

再び比類なき金の神像を作り

心のハリドワールに据え付けるのだ

その姿は美しく、その魅力は心を奪うものでなければならぬ

---

<sup>1</sup>「寺」と訳した語は shiwālah (正しくは、shiwāla) で、ヒンドゥー教 (シヴァ派) 寺院のこと。

その神像に秘めた願いを叶えてもらうのだ  
首には聖紐をかけ、手には数珠を持ち  
寺にいながらモスクの荘厳さを示すのだ<sup>2</sup>  
人々によく見えるように胸を切り裂き  
すべての魂に言わば火を点じるのだ  
眼のガンジス川から水を引き  
この神像の前に水路を作ろうではないか  
この神像の額に「インド」と書き記し  
忘れられていた歌を再び世界に聞かせよう  
毎朝、起きては甘美な讃歌を歌い  
礼拝する者全員に愛の美酒を飲ませよう  
寺に礼拝者を呼ぶときは  
アザーンの声は法螺貝の中に隠すのだ<sup>3</sup>  
愛と呼ばれているものは目に見えぬ火だ  
宗教間の争いはこの火で燃やしてしまうのだ  
愛する者の仕来りとは、心身を捧げること  
泣くこと、耐えることそして<sup>か</sup>彼の者を愛すること<sup>4</sup>

---

<sup>2</sup>「聖紐」はヒンドゥー教を、「数珠」はイスラームを表している。

<sup>3</sup>「アザーン」モスクのミナレット（尖塔）から発せられる礼拝への呼びかけ。

<sup>4</sup>「彼の者」<sup>か</sup>愛しい者。

詩集では、最後に以下の句が結句として追加されている。

信仰する者の歌には力がある、安らぎがある

この世に住む者の救いは愛の中にある

## 解説

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal, 1877–1938) の、1905年から1908年にかけてのイギリス、ドイツ留学以前の、ムスリムとしての意識よりもインド人としての意識が強かった時期のウルドゥー詩「新しい寺 (Nayā shiwālah)」の翻訳である<sup>5</sup>。この詩はラホールのウルドゥー語雑誌『宝庫 (Makhzan)』の1905年3月号に掲載され、後にウルドゥー第1詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā)』(1924年)に収録された。詩集収録の際、かなりの詩句が削除された。留学前のイクバルの思想や詩を検討する基礎となるよう<sup>6</sup>、本稿では雑誌『宝庫』を用いて翻訳を行った。詩集『鈴の音』のテキストとの異同を示すため、詩集収録時に削除された部分は斜体にした。

---

<sup>5</sup> ウルドゥー語の詩であるが、ヒンディー語の単語が多用されている。

<sup>6</sup> 留学前のイクバルの詩作品は、未だ学術的に信頼できるような形で纏められていない。